

第6講：48 「待ってた、待ってた」

はじめに

『稿本天理教教祖伝逸話篇』の48話は、「待ってた、待ってた」である。まず、逸話に出てくる語彙、語義について、若干述べる。上田ナライトが14歳の時、「布留の石上さんが、総髪のような髪をして、降りて来はる。怖い。」と言って泣き出したとある。石上は、「いわがみ」と呼び、岩神のことで、これは各地にある。総髪は、通常、明治以前の男性の髪型、月代（さかやき）を剃らずに後ろで括ったもの、儒者や医者等の髪型である。萱生は、ナライトがいた園原の隣の小字で、菅原道真をお祀りしていた天神祭は、今は行われていない。

この逸話は、教祖が「五代前に命のすたるころを身をもって救ってくれた叔母」であると、ナライト様を「待ってた」と仰せになったのである。ここでは、上田ナライト様の果たされた役割と、「待ってた」の2点に絞って、お話しした。

1. 上田ナライトのこと

ナライトは、文久3年(1863)2月23日、大和国山辺郡園原村(現、天理市園原町)に上田嘉助(後に嘉治郎)・たきの子として生まれた。明治9年、14歳の時、「怖い」と異常を訴え、手を尽くしたが効能がなかった。隣家の西浦弥平から「にをい」が掛り、教祖にお目に懸かったところ、「待ってた、待ってた。」とのお言葉である。翌10年、鳴物の内、教祖より胡弓を教えて頂く。

明治12年、教祖は、ナライトを貰い受けられた。また「一身暮らし」とも仰せられ、一生独身を通すことになった。教祖の身の回りのご用、炊事、掃除、針仕事、機織りなどをし、赤衣のお針始めもつとめた。

明治20年、教祖は現身をかくされた。ナライトは、お葬式に参列した後は、お仕えする方もなく園原に戻っていたが、おぢばと園原を行き来していた。明治33年、家内中に身上の患いに悩む者が続き、4月、母たき、妹ナラトメ、そして17歳の甥榎太郎とともにおぢばに移り住んだ。明治40年6月6日夜、ナライトは、はじめにおさづけの理を渡した45歳であった。3日後に、本席が出直した。ナライト宅は間もなく完成し、ナラトメ、榎太郎とともに移り住んだ。そこから、黒の紋付に黒の丸帯をしめて、本部へ出掛け、お運びをつとめている。

大正6年(1911)、ナライトの病気から、ナライト宅にお運び場所を普請。竣工後は、そこでおさづけを渡した。翌大正7年3月、再び胃腸の病となり、中山たまへがおさづけを運ぶことになり、ナライトはつとめを了えた。その後、病気は全快し、御供の紙を折ったり、針仕事や庭木の手入れなどをして、静かに暮らした。大正13年、ナライト宅が移転。

昭和12年1月11日の明け方、筆を持って、半紙に「松竹梅めでたく納めまいらせ候 なら糸」と書き、12日に出直した。享年75歳。参考：『改訂天理教事典』(1997年)、上田嘉成『上田ナライト抄伝』、宇野たきゑ『おぢば春秋』(越之国大教会、昭和30年、昭和47年再版)。

ナライトは、教祖より(1)一身暮らし、(2)人足社、と言われ、本席に替わって、(3)おさづけのお運び、を担うようになる。

(1) 一身暮らし

教祖は、ナライトに対して、「一身暮らし」と、一生独身を通すようにといわれている。教祖の身の回りのご用である、炊事、掃除、針仕事、機織りなどは、「守り」として、増井りんをはじめ、多くの方がつとめているが、「一身暮らし」は、一人だけである。27歳の時、結婚について何うと、「一身暮らしならば、一身暮らしの理は与えよう。一身一人のあたゑはいつ〜どうでもこうでも与える。なれども心の理を改めて、こうと思うなら、又それだけのあたゑは渡そう。これからは先が長い。一身暮らしのあたゑはどういう事やろと思うやろ。影は見えん、姿は見えんと思うやろ。なれども一身暮らしの理は、立てゝ貰いたい〜。」(明治22年11月30日)と仰せられている。

(2) 人足社

明治12年陰暦2月、教祖は「ナライトの身の内、神の方へ貰い受け、その上は、あつけんみよの社として人をたすける」と、ナライトを貰い受けられた。あつけんみよ(あつけん明王)とは、「おびやさんしき」(中山正善『こぶきの研究』、和歌体14年、山沢本)、

つまり、胎内の縁を切る(たいしよくてん-法華)、子供を引き出す(をふとのべ-真言)、産んだ後の始末のつなぎ(くにさづち-禅宗)の三神を総称して「あつけん明王」(石崎正雄『こうぎと裏守護』天理やまと文化会議、1997年、310、311頁)とある。

「おふでさき」に、

この心どふしていさむ事ならば

月日にんそくつれてゑるぞや 十号 83

とあり、「註釈」に「にんそくは、たすけ一条の上に親神様の手足となって、世界一列を救けてまわる者達の意。」とある。「おさしづ」にも「神が出て、こうと人足まわしするよなもの。」(明治30年4月4日夜 増野正兵衛身上願(続いて刻限)とある。

また、「存命より一名暮らし」と言うた理、なか〜の理である。又、人足社、又、入り込むという。この理聞いて居る。人足代々続いて又々という。切れてはならん。今一時の処勤めて居る。なれど、よう聞き分け。いつまでと思うたら違う。又後々役目何でも彼でもさしづ、さしづ役無くばならん。たゞ人間は一花咲いても理が無い。俺しようと言うても、言葉出るものやない。」(明治32年7月24日 園原上田ナライトの運び方の事に付願)と「さしづ役無くばならん」と論されている。

(3) おさづけのお運び

「一身暮らし」も「人足社」も、「おさづけのお運び」に収めていく感がある。明治32年7月24日の「おさしづ」の「押して願」に「一名暮らしと言うた。年限を繰りてみよ。人足社と言うて貰い受けたで、と言うたは、もう何年経つか。」とある。「道は、皆継目あるで〜。継目知りて居るか〜。知らずに何と呆けて居る〜。皆んな取損いて居る〜。教祖という道内から潰して居る。」(明治40年3月13日)と手厳しい。

明治40年6月6日、教長(初代真柱)が、「寿命縮めましても宜しう御座りますから、一先ず御踏み留め下されませと御願」に対し、教長と飯降政甚との御手を御握り、「皆々よい〜。」「さづけ一点の順序やで。手伝いやで〜。最初是不細工やで〜。日々代わりさせるのやで。当分は不細工なものでありますや(御うなずき遊ばさる。)呼び取りてもよい。呼び取らいでも同じ事や。(とお言葉あり。)

「今日から十分のさづけを渡す。詳しい事要らん。あしきはらいのさづけや。今日からは十分授ける。後は前の型通りや。教長より、只今より運ばせるのでありますや、と御尋ね下されば「夜が初まり〜。晩でよい。今日はこれにて。踏ん張って来たのう〜。えらかったのう〜。一同大きに御苦労。」(と御挨拶下されて)「肩の荷が降りた。よかった〜。」「これで一日の役が済んだなあ〜。」

これから、ナライトは、おさづけのお運びを始めたのである。

2. 待っていた

教祖は、ナライトを待っていたように、初期の大勢の信者を待っておられた。『稿本天理教教祖伝』では期待の大工といわれた飯降伊蔵、『稿本天理教教祖伝逸話篇』では、西田コト(8「一寸身上に」)、榊井キク(10「えらい遠廻りをして」)、山中忠七・その(11「神が引き寄せた」)、山本利三郎(33「国の掛け橋」)、増井りん(36「定めた心」)、山田長造(58「今日は、河内から」)などがそうである。教祖は、教祖伝や逸話篇にあるように、教祖を求めて来た人には、すべて「待っていた」と声をお掛けになったものと思われる。

おわりに

教祖は、その意味でも、今も待っておられるのである。大切なことは、教祖をお訪ねすることである。もちろん、その先には、教祖がこどもの「成人」を望まれているのである。

西山輝夫は、教祖が待ち望まれている構造は、「教祖ご在世時代も現代も変わっていない」(西山輝夫「木や石」『みかぐらうたの世界』(天理やまと文化会議、1989年、21頁)と述べている。ただし「神は人の心に乗って働く」(同書、23頁)とも言われている。

「おふでさき」3号の冒頭にある「水」の譬喩に、「澄む」と「濁り」で悟り取るようにと言われ、救済の場に身を置くことの大切さを述べられているが、教祖の道具衆として、「待ってた」の意味を考え、実践したいものである。